

いわき 莉那 作  
岩城

# きみとつむぐ夏の日

- 創作年度・上演年度 2022年
- 5人から10人で上演可能
- 作品紹介  
東京から田舎に引っ越した高校生、「友」。友達ができずに立ち寄った神社近くの公園で、不思議な少女「つむぎ」と神主の「山田」に出会う。  
誰しものが抱える小さな悩みと、一步踏み出す勇気の大切さがテーマです！
- 上演許可を得るための連絡先 山口県立宇部高等学校演劇部（電話：0836-31-1055）

きみとつむぐ夏の日

友

つむぎ

山田

女子高生<sup>1</sup>

女子高生<sup>2</sup>

友母

▼SE 蝉の声

▼女子高生<sup>2</sup>人、歩いてくる

女子高生<sup>2</sup> 「あつついー。溶ーけーるー。死んじゃうー。」

女子高生<sup>1</sup> 「うるさいっっちゃー!もつとシャキツとしなさいよ、シャキツと!暑い暑い言っちよつたらこつちまで暑くなるやんか!」

女子高生<sup>2</sup> 「はい溶けたー。私はもう溶けましたー。でろーんでろーんだらだらー。」

▼女子高生<sup>2</sup>、女子高生<sup>1</sup>にもたれ掛かる

女子高生<sup>1</sup> 「暑苦しいっっちゃっ!」

▼突き飛ばす

女子高生<sup>2</sup> 「いたっ!痛い痛いっ!仕返しっ!」

女子高生<sup>1</sup> 「はあっ?!暑くて仕方ないんやけひつつかんでーや!」

女子高生<sup>1</sup> 「おおーピリピリしてますなあ。委員会なんやけしようがないやろー?」

女子高生<sup>2</sup> 「分かつとるけどさあ。夏休みまで委員会集まること無いやんねえ?」

女子高生<sup>2</sup> 「いやそれなあ?てゆうかセミうるさー。」

女子高生<sup>1</sup> 「あ、そうだ。今年に行く?お祭り。金魚すくい、今年こそリベンジしたいんやけど。」

女子高生<sup>2</sup> 「あーあれ?ポイ薄すぎてすぐ破れるやつ!』はい、500円ね』って」

女子高生<sup>1</sup> 「似とる似とる!...あ。ねえ、あの子はお祭り、来るかねえ?」

女子高生<sup>2</sup> 「あーあの東京から来た子?」

女子高生<sup>1</sup> 「来てくれたらええなー。あ、あんた誘ってみいやー」

女子高生<sup>2</sup> 「私?無理無理!.....」

▼会話続く

▼つむぎ、鳥居の裏から出てくる

▼しばらくして、友 登場。友を見た途端、つむぎが友を気にし出す

友 「はあ、あつつ...:...ミンミンミンミンうるさいなあもう...:。」

▼友 電話をかける SE

友 「...あ、もしもし?久しぶり。ううん、いやーほんと暇しててき、なんてったって周りに

田んぼと畑しかないもんだから。あはは！え、友達？全然だよー。みんな悪い子では無さそうなんだけど…。うん、もう既に東京が懐かしいよー。ねえ、今度そっちに、つてああ…。そう、だよ。うん。…あ、ううん、ごめんね、邪魔して。…ばいばい。」

▼電話切れる SE  
友 再び電話をかける SE

友 「…もしもし…。うん、そう、私！ねえねえ、夏休み暇してないの？遊ぼうよ、…。ああ、そっか。そうだよ、ううん！全然だよ！部活頑張つてよね！応援は…。いけないけど。ううん。…じゃあね。」

▼友 手持ち無沙汰にスマホをいじって帰ろうとする  
▼つむぎ 友に話しかけようと急いで追いかけるも、転ける。

つむぎ 「わあっ！」

友 「うわっ？え、なに？！」

つむぎ 「いたあい！」

▼友、「一回無視しようとするも話しかけに行く

友 「ちよ、ちよっど？…あの、大丈夫？」

つむぎ 「…（見つめる）」

友 「…え？だ、大丈夫…？」

つむぎ 「ねえねえお姉ちゃんっ！お姉ちゃんお悩みがあるんでしょっ？」

友 「は？」

つむぎ 「だってだって、お姉ちゃんつむぎのこと呼んだでしょ？」

友 「何言つて…つむぎ？つて誰よ？」

つむぎ 「つむぎ？つむぎはねっ！つむぎっていうんだよー平仮名で、つむぎ。いいお名前でしょっ？」

友 「な、何なの急に…怖いんだけど。」

つむぎ 「つむぎはねえ、だあい好きなんだあ。つむぎつてお名前。お母さんがつけてくれたんだよ。ねえねえ、お姉ちゃんは何んて言うの？」

友 「いや、ちよ、は？」

つむぎ 「お名前だよ、おーなーまーえ！」

友 「なんであんたなんかに教えなきゃいけないのよ…。あんた、何してんのこんなところで。」

つむぎ 「つむぎね、いつもここに居るんだよー。こうやって、けんけんぱつてしたりーうふふ、楽しいでしょ？」

友 「はあ…？なんか変なやつに捕まっちゃったな…今どき巫女のコスプレって…」

つむぎ 「あっ！つむぎ良いこと思いついた！ねえっ！お姉ちゃんも一緒に遊ぼっ！2人で遊ぶほうが絶対もっと楽しいよっ」

友 「遊ばない」

つむぎ 「ほらほら、ここに丸を〇つ書けば、」

友 「だから遊ばないって。」

つむぎ 「えーいいじゃんおケチ！」

友 「あんたこの辺りの子？ママは？お姉ちゃん忙しいの、あっち行っててくれるかな？」

つむぎ 「つむぎ子供じゃないもん！お姉ちゃんが一緒に遊んでくれるまで、つむぎことかないっ！」

友 「あつそ。…もういいや。」

つむぎ 「あーつまつてまつて！…怒っちゃった？」

友 「…別に怒ってはないけど、遊ぶって言ったって…。」

つむぎ 「じゃあお名前なら良い?!」

友 「名前なんてどうでもいいじゃん、めんどくさいなあ」

つむぎ 「どうでも良くないもん！お名前ですつごくワクワクするんだよ！」

友 「ワクワク？」

つむぎ 「うんっ！誰かに呼んでもらうとー心の…この辺？がぼわぼわーってして、あつたかい気持ちになるの！つむぎお母さんにつむぎーって呼んでもらうのだからいいすき！だからね、お名前つてワクワクするの！」

友 「よく分かんないけど。それなら尚更、私はあんたに名前、教えなくていいってことだよね。」

つむぎ 「ええーっ?!なんでなんで！」

友 「私はあんたに名前呼ばれても嬉しくないし、ワクワクもしない」

つむぎ 「ええ！じゃあつむぎはお姉ちゃんのことなんて呼ばいいの？」

友 「別に話しかけなければいいでしょ」

つむぎ 「ええやだよー！どうしてそんなこと言うの？」

友 「あーもう、鬱陶しいなあ。あんた何なの？暇なの？」

つむぎ 「ひ、暇じゃないもん。」

友 「暇でしょ。」

つむぎ 「暇じゃないもん！」

友 「暇じゃん」

つむぎ 「暇じゃないもん!!」

友 「……暇じゃないもん」

つむぎ「暇だもんー！」

友「…」

つむぎ「あれ？むう。よく分かんないけど、つむぎはお姉ちゃんとお話したいだけだよ！」

友「…」

▼友 公園から出ていこうとする

つむぎ「あつ待ってよ！どこ行くの？お家かえるの？あーつそれともお友達と遊びに行くの？」

友 「なんなの？あんだ。バカにしてんの？」

つむぎ「もしかして、怒ってるの…？ごめんね、つむぎ、お母さんにもよく怒られるんだ。そそつかしい、そんなんじやお母さんみたいにはなれないわよーつて。」

友 「あー落ち込まないでよ、調子狂うなあ…」

つむぎ「あの、あのね、つむぎお母さんみたいになりたいの」

友 「お母さん？」

つむぎ「うんっ！つむぎのお母さんすつごーくカッコイんだよ！町のみんなの人気者でね、つむぎのお話もいっぱい聞いてくれて、それとね、」

友 「わかった、わかったからゆっくり喋んなよ」

つむぎ「あーっ笑った！うんうんっやっぱり笑顔の方が素敵っ」

友 「…うるさいな」

つむぎ「えっへへ」

▼友母、登場。

友母 「あら、こんなところで何してるの？」

友 「か、母さんっ？！」

つむぎ「えっ？！」

友母 「今日はお友達と遊びに行くんじゃないの？」

▼つむぎ隠れる

友 「あ、えっといや、その」

友母 「ん？」

友 「い、今から！今から行くの。友達、寝坊しちゃったみたいで、ここで時間潰してただけ！」

友母 「あらそう。ご近所さんに聞いたんだけど、この辺りは人通りも少ないらしいから、気を付けなさいよ？ひとりじゃ危ないわ。」

友 「ひとり？何言ってるの母さん！ひとりじゃな、つてあれ？つむぎっ？」

友母 「…？つむぎって？」

友 「今、居たでしょ？ここに、白い格好の…女の子。」

友母 「やだ怖いこと言わないでよ。最初から」人だったじゃないの。」

友 「おかしいな…」

友母 「あらやだ、もうこんな時間？早く帰って今日のサスペンス見ないといけないのにい。あ、遅くなる前に帰るのよ。帰ったらお友達とのお話、聞かせてちょうだいね。」

▼友母ハケ。

友 「ちよつと母さ、」

つむぎ 「お姉ちゃんのお母さん、すつごく優しそう！」

友 「わあっ？！びつくりしたー。つてつむぎ！どこに居たの？！あんた居ないから母さんに変な目で見られたじゃん…」

つむぎ 「だ、だつてえ」

友 「もう…。」

つむぎ 「お姉ちゃんのお母さん、いっぱい袋持つてたねえ」

友 「買い物帰りなんじゃないの。」

つむぎ 「えー！お買い物！あんなにいっぱい？！すごいすごい！！」

友 「そう？」

つむぎ 「いっぱい入つててすつごく重たそうだったのに、簡単にもつてて…お姉ちゃんのお母さん、ちからもちー！」

友 「たしかに、母さんって凄いのかも。」

つむぎ 「つむぎのお母さんもすごいよ！！」

友 「分かったつてば。あんたのお母さんつて、何してんの？」

つむぎ 「お母さんはね！！かみさ、あ、えつと、その…」

友 「なによ？」

つむぎ 「お母さんに、言っちゃダメつて言われてるんだ…」

友 「なにそれ？ま、別にいいたくなきゃ言わなくていいよ」

つむぎ 「いいの？」

友 「誰にだつて聞かれたくないことくらい、あるでしょ」

つむぎ 「でも、内緒つて寂しい。」

友 「あーもう。例えば、あんたがここで私にお母さんのこと話して、怒られるとするでしょ？」

つむぎ「つむぎ怒られるのやだぁ!!」

友 「例えば、の話。いい? あんたのお母さんはあんたが約束破ったら悲しいでしょ」  
つむぎ「うん…」

友 「お母さんが悲しい気持ちになったらあんたも悲しい。違う?」

つむぎ「違わない。お母さん悲しい、つむぎも悲しい」

友 「でしょ? ってか、そもそも私は別に寂しくないし。言いたくないなら言わないでいいよ」  
つむぎ「そっかぁ! 大好きの内緒なら寂しくないってことだね!」

友 「大好きの内緒?」

つむぎ「えへへ。つむぎが悲しくならないようにって、つむぎのこと考えて言ってくれたんでしょ? お友達のこと考えてお喋りするの、大好きのこと考えてお喋りするのは、大好きの内緒! だから、大好きの内緒。ふふ、内緒、寂しくないって言ってくれてありがとう!!」

友 「別に、そんなつもりじゃ。」

つむぎ「ねえ、せっかくお友達なっただから、お名前教えてよ!」

友 「もー話聞きなよ…。…友。」

つむぎ「え?」

友 「名前、友っていうの。」

つむぎ「とも?!」

友 「うん。こう書くんだけど。」

つむぎ「えっとー。こうして、こうして…あれ?」

友 「あーもう。こうして、こうして…こう。」

つむぎ「わあっ! かけたあ!」

友 「そう。それが…友達の友っていう字。」

つむぎ「すごいすごいっ! とも、ともちゃん、とつてもいいお名前っ! もつと早く教えてよー!」

友 「怪しい人には名前教えちゃダメなの。知らないの?」

つむぎ「つむぎ怪しくないもん!」

友 「どう考えても怪しかったでしょ! ていうか、なんなら今も…。」

つむぎ「酷い酷いっ」

友 「いたた、もーごめんって。…本当はさ、私この名前好きじゃないの。」

つむぎ「え? どうして?」

友 「ほんとの友達って呼べる人、居なかったし。変でしょ？友達いないのに友、なんて。」  
つむぎ 「変じゃない！ともってお名前、ともちゃんにぴったりのいいお名前だもんっ！それに、つむぎはともちゃんのお友達でしょっ？」

友 「友達…。ふふ、仕方ないから暇な時は相手してあげるよ。」

つむぎ 「えっ！つむぎと遊んでくれるの？やったあ！じゃあ、よいドンッ」

友 「え、ちよつとなに」

つむぎ 「えへんっおーにさんこちらっ手の鳴る方へー！ともちゃん、鬼だからねっ」

友 「はあ、もう…」

▼友 だるそうに追いかける

▼しばらくして、女子高生〆人の喋る声が聞こえてくる

つむぎ 「あれ、ともちゃん？どこいくの？」

友 「…今日はもう用事思い出したから帰る。」

つむぎ 「えっ！もう終わり？？えっ！えっ！ま、また会いに来てくれるっ?!」

友 「気が向いたら、ね」

つむぎ 「わあ、やったあっ！絶対、絶対だからねっ！！約束だよーっ！…！いつちゃった」

▼友 ハケ

▼女子高生が通りかかるがこの間つむぎは見えていない

女子高生 「せっかくの夏休みだったのに委員会はあるし、もう何もしたくないわーあっ！あんなところにベンチはつけーん！もう動かせーん」

女子高生 「はあ…。もう、ほら、早く行こ。帰りにアイスでも買って帰ろうや」

女子高生 「アイス?! やったあ奢ってくれらん？」

女子高生 「ちよつ、私奢りなんて一言も言っていないやん！」

▼女子高生ハケ

▼つむぎ一人で遊ぶ しばらくしてハケ

▼暗転

つむぎ 「つーむーぎーのーうーたーがつきいこーえーてーくーるーよっ、らん、らん、らん、らん、らん、らんらんらんらん、らんらんらんっ♪」

友 「なにしてんの…」

つむぎ 「あっ！ほんとに来てくれたんだっやったあ！ねえねえ見て見て、これ！」

友 「ちよつとやめてよ引っ張らないで。なに？」

つむぎ 「ほらほら、これ！なつまつりっ！」

友 「なつまつり？」

つむぎ 「毎年この町でやっててね、ここの公園にも屋台が出るの。あ、この公園に出る屋台は」



つだけなんだけどね。あのね、これつむぎと一緒に」

友 「行かない」

つむぎ 「ええええ!! 行こうよー!!」

友 「だってそれ、この町の人いっぱい来るんでしょ」

つむぎ 「うん! ちよつとだけど花火もあるからいろーんな人が見に来るよつ」

友 「じゃ行かない。」

つむぎ 「え? どうしてどうして? あ、分かった! おっきい音怖いんだー」

友 「あんたじゃあるまいし、そんなわけないでしょ。」

つむぎ 「えーホントに行かないの?」

友 「行かない」

つむぎ 「ちよつと嬉しそうな顔で)行く?」

友 「行かない。」

つむぎ 「行く?」

友 「行かない。」

つむぎ 「行かない!(ドヤ顔)」

友 「行かない。」

つむぎ 「なんでえ!」

友 「できるだけ人と会いたくないの。」

つむぎ 「どうして?」

友 「クラスメイトなんかと会ったりしたら気まずいじゃない。」

つむぎ 「なんで?」

友 「なんでどうしてってそればかり。自分で考えなさいよ。」

つむぎ 「まってよ、どういう(こと)」

友 「質問禁止!!」

つむぎ 「ひゃ!」

友 「私の気持ち分かるまで質問しちゃダメだからね。」

つむぎ、無言で見つめる

友 「そんな目で見てもダメ。」

つむぎ 「うーうーうー」

友 「唸るのもダメ。」

つむぎ「無言でムーンウォーク」

友 「なにそれ」

つむぎ「ムーンウォーク」

友 「知ってるー!!」

つむぎ「もーわかんないっ!」

友 「やっぱあんたにはわかんないか。いい? 私が人に会いたくないのは、私とこの街の人達が友達じゃないから。」

つむぎ「へ?」

友 「私ね、2週間前、この街に引っ越してきたの。」

つむぎ「えっお引越し?!」

友 「父親の仕事の都合でね。夏休み入る直前だなんてほんとタイミング最悪。なんでこんな事になっちゃったんだか。」

つむぎ「そっかあ。じゃあつむぎが、お友達つくるお手伝いしてあげるよ!」

友 「はあ? え、話聞いてた? グループできてるし、夏休みだし、そんなの無理だつて。」

つむぎ「だあいじょうぶ! つむぎに任せて!」

友 「信用ならないにも程がある…」

つむぎ「はあい、それでは! つむぎ先生に質問あるよーって人は手を挙げてくださいっ」

友 「はあ。もう…。…はい。」

つむぎ「はい、その君っ! なんですかっ」

友 「…友達つて、どうやって作るんですか。」

つむぎ「よく聞こえませんでした」

友 「友達つてどうやって作るんですか!」

つむぎ「ふむふむ、もう1度」

友 「友達つて、どうやって作るんですか!」

つむぎ「どうしたの? お顔赤いよ?」

友 「…!」

つむぎ「んん、こほん。友達作りの秘訣はずばり! きっかけ作りなのさあ!」

友 「聞いた私が馬鹿だった。」

つむぎ「あつまってまって帰らないで!」

友 「…あのねえ、そのきつかけつて奴が作れないからこんな事になってるんじゃない。言わせないでよこんなこと」

つむぎ「でもでも！お祭りつて皆ワクワクしてるから、お話も盛り上がるよ！」

友 「みんながみんなあんたみたいに単純じゃないんだつてば。」

つむぎ「むう。ともちゃんが難しそうなことばかり考えすぎなんだよ。」

友 「そんなこと言ったつて…」

つむぎ「ねえ、いいから行こうよ！お祭り、案内してあげるから！」

友 「……わかった」

つむぎ「やったあー！」

友 「ただし、クラスメイトと会いそうになったらすぐ帰るから。」

つむぎ「それじゃあ意味ないじゃん！」

友 「嫌なら行かない。」

つむぎ「そんなのずるい！意地っ張り！」

友 「意地っ張りで結構。で。その祭り、いつやるの？」

つむぎ「んつとねえ、明日。」

友 「明日?!」

▼そこに山田が段ボールを担いで入ってくる。

▼その他ハッピを着た人達が後ろで屋台を組み立てていく。

つむぎ「あーっ」

山田 「おおー。つむぎじゃねえか！久しく見てねえと思ったたらよお、こんな所で油売りやがつて。母ちゃんに怒られるぞー？」

つむぎ「山田さん！！なにもつてるのー??」

山田 「つたく、お前はいつでも元気だなあ。こつちは準備で忙しいつてのに。つか、なんだ？お前」

友 「(ビクツとして)あ…こんにちは。(つむぎに小声で)ちよつと…あの人、誰？」

つむぎ「町内会の会長さんの山田さんだよ！」

友 「ちよ、声大きい…っ」

山田 「お？つむぎ、お前もしかして」

つむぎ「えへへ、うん！つむぎ、頑張った！」

山田 「そうかそうか。よー嬢ちゃん。見ねえ顔だなあ？あ、そういや最近すぐそこに越してきた家族がいるとかなんとかいつてたなあ。そこんとこの子かあ。あつはつは、なんも無い町だが、よろしくなあ。こいつ、こー見えてちつちやい頃から人見知りですよ。あまり人前に出ねえから。すまねえが面倒見てくれ、な！」

つむぎ「山田さん、しーっしーっ!」

友 「はあ……つむぎが人見知り? いやいや、この子に限って、そんなわけ」

山田 「はは。まあ、俺が言うのもなんだが仲良くしてやってくれや。」

友 「あ、はい。えつと……あの、山田……? さん、とつむぎって……」

山田 「あ? ああ。俺んちその裏の神社ですよ。こいつは……神社で勉強してる……んー。あれだ! くつつき虫ってどこかな。あはは!」

つむぎ「くつつき虫?! ひどいひどい! ! つむぎと山田さんは心の友でしょ!」

山田 「あつはつは。そりゃいい。」

つむぎ「もー! なんて笑うの! ママに言いつけちゃうよー!」

山田 「はつはつは、おつかねえなあ。」

友 「あの……」

山田 「あーわりいわいい。友達と話してる邪魔してすまねえな。さて、俺も真面目に仕事すつか」

友 「いえ、あの。何……されるんですか?」

山田 「ん? ああ、明日の祭りの準備してんだよ。」

つむぎ「準備?!」

山田 「おう。神社の方は粗方終わったから、後はこの公園だけってこつた。」

つむぎ「楽しそう! ! つむぎもやりたい!」

友 「いや、あんたそんなのやらせてくれるわけ……」

山田 「いいぞ?」

友 「いいんだ……」

つむぎ「何すればいい?!」

山田 「あーじゃあ、俺は他の段ボール持ってくるから、お前らはそこの段ボールに入ってる景品、並べてくれるか? ちゃんと心人で協力しろよ。」

友 「えつ? ちよつと! 私やるなんて言っつてな、」

山田、よろしくなーと言っつてハケ。

つむぎ「うわあ凄いい。お菓子にくぬいぐるみにく」

友 「なんで私がこんなこと……。私、帰っつていい?」

つむぎ「山田さんに怒られてもいいの?」

友 「……」

つむぎ「うわあ、くまちゃんっ」

友 「ふーん、田舎なのに意外と大きな祭りなのね。」

つむぎ「うん！おかあさ、…この町の神様に毎日のありがたうを言う、大切なお祭りなんだ！！」

友 「へえ。あ、もしかして、その神様を祀ってるのがその神社？」

つむぎ「うん！山田さんが神主さんだよ！明日はお餅も降ってくるんだよ」

友 「お餅が降ってくる…餅まき？」

つむぎ「うん！いつもお祭りの最後にやってるの。あ！あとねえ、八百屋のジローちゃんは何を開発するかも毎年みんな楽しみにしてるんだよ。去年はねー。焼きとうもろこしとチョコバナナを組み合わせたチョコとうもろこし！」

友 「…それ、おいしいの？」

つむぎ「駄菓子屋のトメおばあちゃんは、焼とうもろこしとチョコバナナが別々に売られてる理由が分かる味、って言ってた！」

友 「不味いのね…。」

つむぎ「つむぎは美味しいと思っただけどなあ。」

友 「あんた、なんにでも美味しいって言いそうだけどね。」

つむぎ「そんなことないよ！ピーマンは好きじゃないし…」

友 「ピーマン、美味しいじゃん。ピーマンが嫌いだなんてお子ちゃまなんじゃない？」

つむぎ「ピーマン食べれるんだ！すごい！！大人！！」

友 「ピーマン食べれるようになる頃には、あんたのその自由気ままな感じもちよつとはマシになったりするのかな」

つむぎ「つむぎもピーマン好きになれるってこと？」

友 「いや、どうかな。あんたは大人になっても今のままだったりしてね。」

つむぎ「ええー！つむぎもピーマン食べられるようになりたいー！！」

友 「じゃあはやく大人にならないとねえ？」

つむぎ「つむぎね、お母さんみたいな大人になるんだ！」

友 「分かった分かった。あんたほんとにお母さん好きだよね」

つむぎ「お母さんだけじゃないよ！」

友 「え？」

つむぎ「山田さんも、この町のみんなも、ともちゃんのこと、つむぎ大好き！」

友 「はいはい、そうだね」

つむぎ「ともちゃんは？？ともちゃんも、つむぎのことすき！？」

友 「えっ、…あんたみたいなうるさい奴、嫌い」

つむぎ「うそだあ！最初のときよりも、ちょっとだけふわってなったもん。」

友 「ふわ？」

つむぎ「うん！だいすきーって思ってるときに出る、あつたかくてふわふわしてるやつ！ともちやんの周りにも出てるー」

友 「はあ?! そんなの出てないって!」

つむぎ「えーでてるよー? うふふ、ともちやんのふわふわ見ると、つむぎもいっぱいふわふわな気持ちになるんだよー」

友 「またあんたは訳の分からないこといって…」

つむぎ「訳の分からないことじゃないもん! ちゃんとふわふわしてるもんー!」

▼段ボールをもった山田登場。

山田 「おーなんだなんだ、喧嘩でもしてんのか? って、景品全然準備できてねえじゃねえか! 人してサボってたなコノヤロウ」

友 「あ」

つむぎ「お手伝い、すっかり忘れてた!」

友 「すみません…」

山田 「つたく、せつかくジュースも買ってきてやったのに。」

つむぎ「やったあ、ジュースだあ!」

山田 「おいこら。ちゃんと手伝ったら、だからな! ぬるくなる前にさつさとやれつてんだ」

つむぎ「はあい。(しよげている)」

友 「はあ……」

▼無音で3人、作業。

▼暗転。  
▼朝。つむぎ登場。

つむぎ「山田きーん!」

山田 「おう、つむぎ。今日は一段と元気だなあ」

つむぎ「えへ。だって今日はお祭りの日だもん! つむぎずっと楽しみに待ってたんだよ!」

山田 「いつもそんなくらい元気な勉強もしたらいいのになあ。そしたら母ちゃんにも叱られずに済むのによっ!」

つむぎ「むっ、それは…おべんきょうはこれから頑張るもん。そんなことより!」

山田 「なんだよ、えらく息巻いて。」

つむぎ「ともちゃん見なかった?」

山田 「ともちゃん??」

つむぎ 「昨日いた子だよ! 今日お祭り一緒に行くって言ったのに、まだ来ないの!!」

山田 「あああの子、ともっていうのか。まだ来ないつつたつてお前:まだ午前中だぞ?みんな夕方にならないと来ねえんじゃねえか?」

つむぎ 「えーでも、町内会の人はみんないるじゃん!」

山田 「馬鹿、屋台の準備してるんだよ。これでも忙しいんだぞ?今日は一日屋台の番しなきゃだからなあ、昨日みたいに手伝うか?」

つむぎ 「もうお手伝いはいいよーお。」

▼友、登場

山田 「そんな事言うなよ、つれねえなあ。おつおいつむぎ。そんなことより、来たみたいだぜ?」

つむぎ 「えっ! (振り向く) あーっ! ともちゃん!」

友 「ちょ、引っ張らないですよ。あ、山田さん、こんにちは」

山田 「おう。随分と早いな?」

友 「まあ:。なんていうか、つむぎが張り切つて早めに来てそうな気がして。」

山田 「ははは! 分かりやすいよなあこいつ。」

友 「ですね。」

つむぎ 「もうっ! 人ともそんな事言わないでよ! あ、みてみて! つむぎが並べたくまちゃん!! 可愛いでしょー!」

友 「もうわかった、わかったから。」

山田 「お前ら、なんか姉妹みたいだなあ」

友 「はっ!?!」

つむぎ 「えっ、つむぎがお姉ちゃん?」

友 「そんなわけないでしょ。やめてくださいよ。姉妹とか。」

山田 「そうかあ? なんかいコンビだと思つてよ。」

つむぎ 「だって、ともちゃん! いいコンビ!」

友 「:私が合わせてあげてるだけだし。」

つむぎ 「ともちゃん恥ずかしがつてるの?」

友 「違う!」

山田 「仲が良くて結構結構。おつ。」

▼SE笛や太鼓の音

山田 「おーはじまった。今年はやいと早めにやるみてえだな」

つむぎ 「みたいって、山田さんかいちょーさんじゃないの？」

山田 「おれあスケジュール管理とか小難しいことは分かんねえからな。代わりにこうやって現場指揮なんかをやるんだよ。今日もほら、祭り全体の現場監督 兼 見回り係 兼 射的屋さんってとこだ。」

友 「仕事、多……。」

山田 「だから申し訳ねえけど、今日はずっと一緒にはいてやれねえんだよ。まあ嬢ちゃんいるし、な。つむぎのこと任せたよ」

友 「あ、はい」

会員 「会長、ちよつと」

山田 「ん？お。わりい、早速呼び出しがかつちまった。ちよつと行ってくるわ。まあ楽しんでつてくれ。つむぎ、案内してやれよ。」

友 「あっありがとうございます」

つむぎ 「山田さん、がんばってね！」

▼山田ハケ。

友 「町内会長つて忙しいのね」

つむぎ 「山田さんは働き者だからねー」

友 「そういうえば屋台の方、まだ準備中みたいなのにもう笛の音、聞こえるのね」

つむぎ 「うん！お神輿とか笛とか太鼓の音とか、本当のお祭りは少し早く始まるの。でも、みんなが来るのは屋台が始まってからだから……」

友 「それでこんなに人が少ないわけね。」

つむぎ 「うんっ、だからね、みんなが来る前に作戦会議しよう！」

友 「作戦会議？なんの？」

つむぎ 「決まってるでしょ！ともちゃんがお友達いっぱい作る方法！」

友 「あのね……だから何回も言ってるでしょ？そんなの無理」

つむぎ 「無理じゃないもん！つむぎはともちゃんのお友達、なれたんだし」

友 「あんたみたいにグイグイ来る方が珍しいの。大体、私がこのままでいいって言ってるんだから別にいいでしょ」

つむぎ 「じゃあどうしてそんなに悲しそうな顔するの？」

友 「え？」

つむぎ 「最初に出会った時もね、ともちゃん、そこで悲しそうな顔して座ってた。」

友 「……」



つむぎ「ともちゃん、ほんとはお友達、欲しいんでしょ？ 勇気出してみようよっ！」

友「…」

つむぎ「ほらほらっ！ 向こうに行けば人いっぱい居るはずだからねっ！ 一緒に行こう！ 大丈夫、怖くないよっ」

友「…やめてよ」

▼友 引つ張るつむぎの手を振り払う

つむぎ「この町の人のみーんな優しいからねっ、ともちゃんが頑張って勇気出したら大丈夫だよ！」

友「…やめてっば！」

▼再び引つ張られるが、また振り払う

つむぎ「ともちゃん… 勇気出してみるの、そんなに怖くないんだよ！ つむぎもね、ピーマン食べる前すっごく勇気いるけど、いつも頑張っでごっくんするの！」

友「…は？」

つむぎ「だからともちゃんの怖い気持ちいっぱい分かるよ！ でも、ともちゃんもつむぎみたいに頑張ってみたら絶対おともだ」

友「一緒にしないでよ」

つむぎ「へ？」

友「あんたみたいなのと一緒にしないでよ！」

つむぎ「ともちゃん？」

友「馬鹿で、能天気なあんたと一緒にしないでっって言ってんの！ どうせあんたの悩みなんてピーマン食べれないことくらいなんでしょ？」

つむぎ「ともちゃ、」

友「話しかけても話しかけても愛想笑いばかり返ってくる。仲良くしてたっつて、ちょっと離れたらもう他人。友達なんてそんなもんなのっ！」

つむぎ「違うよ、ともちゃん」

友「うるさいっ！ 私の事分かったつもりになんないでよ！ 誰にでも簡単に話しかけて… 人の気持ちなんて考えてもなくて、ずかずか入りこんでこないでよ！！… つあんたなんか、大っ嫌い！」

▼つむぎ、鳥居をくぐってハケ。

友「あ…っ」

▼友、追いかけてようとすが少ししてやめ、座り込む

▼しぼらくして、SE 笛太鼓大きくなる。

▼夕方になっっていく。提灯の灯りがつく。

▼山田登場。

山田「おー、そっちは適当に片付けといってくれ！ ああ、すまん、自分の店の方があからよー

！ふー、くたびれるぜ、全く人気者って困るよなあってあれ、つむぎは？」

友 「…やまださん」

山田 「どうかしたか？つむぎ、便所か？」

友 「違うんです。ちよつと、喧嘩しちゃって。あ、いや喧嘩っていうか、なんていうかその…私が一方的に……」

山田 「…。そうかいそうかい。若いからなあ、喧嘩の一つや二つするよなあ。でもな、大事なのは仲直りすることだからよ。」

友 「仲直り、できますかね。私つい酷いこと言っちゃって、つむぎすごい傷ついた顔してた」

山田 「なんだ？つむぎがなんか余計なことでも言ったのか？あいつは無神経なところがあるからな、はは喋ってるうちに俺に似たのかな」

友 「…でも、つむぎの言ってたこと何も間違っていないんです。」

山田 「へえ？」

友 「私、友達がいないんです。ずっとそうで…周りの顔色伺って、前の学校でも、本音言わずに、みんなに合わせて。そんなこと続けてて、気づいたら話す人はいっぱい居ても…本当の友達なんていなかった」

山田 「そうか、嬢ちゃんは優しすぎるところがあつて…それで、ちよつとばかし臆病なんだな。あ、そうだ、ちよつとやってみるか？射的。」

友 「え？」

山田 「ほらよ、特別にお代はタダでいいから、「発打つてみな」

▼友、おそろおそろ構えて、打つ。

山田 「遠慮しすぎだ」

友 「？」

山田 「ほら嬢ちゃんはここから打つたけど、もう一步身を乗り出してみな。ほら、こうやって…」

友 「え…」

▼山田、打つ。命中。

友 「すごい、「発で…」

山田 「俺はな、友達作りも、射的と似たようなもんだと思うんだ」

友 「射的と？」

山田 「こうやって、まっすぐ前を見て…話しかけてみるんだ。倒れるか倒れないかは相手次第だけど、まずはこっちから」歩踏み出して打つてみねえと、分かんねえだろ？」

友 「…」

山田 「大事なのは、怖がらずに」歩踏み出してみる勇氣だつたりするんだよ」

友 「一歩踏み出す勇氣…」

山田 「つむぎなんかはなあ、こんなところまで身を乗り出しやがるんだよ。おいズルだぞ、つても、つむぎあのぬいぐるみ欲しいんだもん、なんて言ってるな。でもまあ、そうまでしてもあいつは全然当たんねえんだけどな！」

友 「あはは、つむぎらしい。…私、ほんとにはつむぎが羨ましかったんです。相手の顔色なんて伺わずに、明るくて、ちよつと言葉は下手だけど、思ってること素直に言えて」

山田 「はは、つむぎがねえ」

友 「…？」

山田 「前も言ったけどつむぎは…ああ見えて人見知りつつうか…いや、事情があつて周りの友達と仲良くなれねえからさ」

友 「あ、そういうえば…初めてあつた時もつむぎ、一人で…」

山田 「ああ。あいつ多分、嬢ちゃんが居てくれて、嬉しいんだと思うんだ。前から表情豊かな子だったが、一昨日なんか目きらきらさせて、母親に友達が出来たんだーっておっきな声でさ。」

友 「…」

山田 「明るく見えるけど、あいつなりに友達つてもんは色々考えてんだ。まあ、いつもから回ってるけどな」

友 「つむぎも悩んでたんだ…」

山田 「最初話しかけた時も、勇氣出したんだと思うよ。なに、つむぎに出来たんだ。嬢ちゃんにも出来るさ。さっきの銃の構え方は、中々様になつてたからな。ははは！とも、だつたっけ？」

友 「え、あ、はい。」

山田 「いい名前じゃねえか。頑張れよ。」

奥から、会長、ちよつとすみませんーと声

山田 「おお、今行くよー！…つむぎとも、仲直りできるさ。じゃあな」

友 「あつ、ありがとうございました」

▼山田ハケ。

友 「…怖がらずに」一歩、踏み出す。」

友、意を決したように拳を握りしめ、上をむく。

友 「つむぎーっ！つむぎーっ！」

▼つむぎを何度も呼びながら、走つてつむぎを探す。

つむぎ「……………ともちゃん」

友 「つむぎーっ！」

つむぎ「あの、あのね、えつと…」

友 「つむぎ、ごめん」

つむぎ「ともちゃん？」

友 「私、あんたに酷いこと言った。」

つむぎ「違うよ！ともちゃんが嫌がってたのにつむぎが無理やり…」

友 「ううん。私が勇気、なかったの。私…私ね。ほんとは、ずっと友達欲しかったの。周りの目気にして、相手の顔色伺ってばかりの自分が嫌だった。でも、気にせずにいられなくて、どうしても怖くて、逃げてた。そうやって周りに合わせてたら、いきなり転校になんてなっちゃって、今度は知らない人達の中で、合わせ方すらわかんなくなっちゃって。」

つむぎ「……」

友 「夏休みになって、クラスメイトと会うことがなくなって、ほつとしてたけど、でもやっぱり寂しかった。」

つむぎ「ともちゃん…」

友 「母さんには友達できたよ、なんて嘘ついちゃって、家にもいれなかったから、ここに来てた」

つむぎ「だから寂しいお顔で座ってたんだ。」

友 「うん。」

つむぎ「最初のともちゃんはねー、キーっておめめしてるのに、ちょっとだけ泣きそうで、こわいよ、こわいよって言うてるみたいだった」

友 「えーそんなこと…あつたかも。」

つむぎ「つむぎもね、あの公園でずっと一人ぼっちだったの」

友 「…つむぎも？」

つむぎ「うん。山田さんがねー、よく町のみんなのお話してくれるんだ。町のみんなのことは大好きだし、山田さんのお話は楽しかったけど、ちよつとだけ寂しくて、いいなあっていつもこの公園で遊んでた」

友 「…」

つむぎ「そしたらね、毎日遊びに来てるのに、悲しそうな顔してるともちゃんがいて…。つむぎ、ともちゃんが寂しそうで、元気にしたいって思ってたのに、いつの間にかつむぎの方が楽しくなっちゃってたの！」

友 「…ふふ、なんか不思議」

つむぎ「なにが??」

友 「私、ずっと自分を偽って生きてくんだったって思ってたのに、あんたが相手だといつの間にか本当の自分になってた気がする。」

つむぎ「えへへ、そっかあ」

友 「つむぎが、頑張ってくれたおかげだよ」

つむぎ「ううん。つむぎね、頑張ったのは最初だけ。お話する前は、つむぎ他の子と遊んだりお話ししたりしたことないし、つむぎとお話しても楽しくないかなって考えたら、すっごく怖かった。でもね！嫌なお話しても、ともちゃんはちゃんとお話してくれたし、優しくて頭が良くて、もつともつとお話したい！って思ったんだ。」

友 「褒めすぎだつて」

つむぎ「あー！！ともちゃん恥ずかしがつてる！お耳まで真っ赤つかー」

友 「はあ？！？もう！余計なこと言わないでつてば！」

つむぎ「ふふ、お友達つて素敵なんだよつて、お母さんが言つてたの本当だった！」

友 「……そつか。」

つむぎ「うん！ともちゃんと喧嘩したまんま、いやだったからちゃんと仲直り、出来て良かったあ」

友 「あ…：そういうえば私、友達と喧嘩したの初めてかも。」

つむぎ「ええ？！はじめて？！」

友 「誰も怒らせないようにつて気をつけてたし。」

つむぎ「つむぎは気をつけてても、お母さんのこと、怒らせちゃうのに。ともちゃんすごい。」

友 「あはは。喧嘩も、大事なのかな。」

つむぎ「えーでも喧嘩ばかりしてたら大変だよーお母さんに怒られるし。」

友 「お母さん大好きなのに喧嘩ばかりするの？」

つむぎ「お母さんと、じゃないよお。山田さんと。」

友 「山田さんと？！」

つむぎ「うん。こないだもね、山田さんが大切にしてたプリン、つむぎが食べちゃったつて怒られたの。ほんとはちゃんと冷蔵庫に入つてたのに山田さんが見つけられなくて、それで食べてないのにいっぱい怒られて、食べてないよ！つて言つたら喧嘩になつちゃつて」

友 「ぶつ、あははははは！何それ、くだらなつ！山田さん、さすがに大人げ無すぎでしょ」

つむぎ「最後は山田さんがもう一回探してプリンあつたのに、ごめんねつて言つてくれなかつたんだよー！！」

友 「あははは、山田さん、あんなこと言つといて自分が謝るの下手なんじゃない！」

つむぎ「山田さんはカッコつけたがりだから！」

友 「あははははは！」

▼花火の打ち上がる音

つむぎ「わあつ！！！！」

友 「え？」

▼花火が開花して、音と光

つむぎ「はなびー！見てみて、綺麗ー！」

友「わ……………」

▼何発か無言の中花火が打ち上がる。  
▼最後に一際大きい音と光

アナウンス「ノイズの後）以上をもちまして、花火の打ち上げを終了いたします。本日は、町内祭りにお越しいただき、ありがとうございます。この後、毎年恒例の餅まきがありますので、公民館へお集まりください、繰り返しします…」

つむぎ「終わっちゃった…」

友「ね…。」

つむぎ「どうだった？花火。少ないけど、綺麗だったでしょー！」

友「そうだね。確かに規模は小さいけど、今まで見たどんな花火よりも、綺麗で…つむぎと一緒にいなかったら、きつと見られなかった」

つむぎ「えへへ、良かった！」

友「…一気に、静かになっちゃったね。」

つむぎ「公民館や通りの方にみんないるし、元々、この公園はお祭りしてなかったからねえ」

友「そうなの？」

つむぎ「うん。だから、屋台も射的屋さんだけだし、花火の時も、ともちゃんをつむぎの心人だけだったでしょ？」

友「ああ、」

つむぎ「山田さんがね、町内会の人にちよつとわがまま言っつて、ここの飾り付けしてくれてるんだあ。『神様を祀るのが目的の祭り』で、神社に由来する公園をほつとくなんて、何事だー！』って言っつたけど、多分、本当はつむぎが寂しくないようにしてくれてるんだと思う」

友「そっか。山田さん、いいひとだね。」

つむぎ「うん！山田さんはつむぎの大切なお友達。」

友「ふふ。心の友、だもんね。」

つむぎ「ともちゃんも、だよ！ともちゃんも、つむぎと山田さんの心の友！だから！」

友「うん、ありがと」

つむぎ「…あ。」

▼袖幕から「ちよつと押さんでよー！」「だつてだつて！餅まき遅れるじゃんー」「もういいつて、花火見れたし、帰ろうや。」「ダメっお餅100個は持つて帰るつて決めちよるんやけつ」「えっガチで公民館まで走るの？無理ー、足痛いー」「えーちよつとー」と高校生達の声

つむぎ「ともちゃん！あそこにいるの、ともちゃんのクラスの友達？」

友「あ…うん…」

▼友、後ずさり

つむぎ「…大丈夫。」

友 「え？つむぎ？」

つむぎ「大丈夫だよ、ともちゃん。ともちゃんなら、大丈夫。」

友 「つむぎ…」

▼友の背中を押す。

友 「そう、だよ。私も、頑張らなきゃ。つむぎと山田さんが教えてくれたもんね。」

つむぎ「ともちゃん…うん！頑張ってね！つむぎ、いっぱいいっぱい、応援してるから！」

友 「ありがとう。私、いつてくる。」

つむぎ「うん！ともちゃん、ばいばい」

▼友、ハケ。  
▼山田登場。

山田 「嬢ちゃん、勇気出せたじゃねえか」

つむぎ「山田さん！どうしたの？用事は？」

山田 「いや、お前らがちよつと心配でよお。ま、でも心配なかったみてえだな。…がんばったな、つむぎ。」

つむぎ「うん！ともちゃんもいっぱい頑張ってるよ！ともちゃん、お友達、できるかな…」

山田 「大丈夫だつて、この町の奴らはみんな、ちよつとばかしシャイだけど良い奴ばかりだからさ。」

つむぎ「うん、ともちゃんもみんなも、優しいからきつと大丈夫だよね！」

山田 「そうだな。嬢ちゃんには感謝しねえとなあ。」

つむぎ「ともちゃんに？」

山田 「ああ。実は俺、ずつとつむぎのこと心配してたんだぜ。」

つむぎ「えっ」

山田 「つむぎのことが見えるのは神主の俺くらいだからな。本当はずつと、友達欲しかったんだろ？」

つむぎ「うん！へへ、つむぎ、一人で遊ぶのも楽しかったけど、ともちゃんが来てくれてからはもっと楽しい！」

山田 「はは、良かったなあ。…ん？でも、なんで嬢ちゃんには見えただ？他の奴らは話しかけても、誰も反応しないのに」

つむぎ「それはねー。あのね、なんだか上手に言えないけど、初めて会った時ともちゃんの心が、つむぎのこと呼んでたんだよ！」

山田 「あの子の心が、つむぎをっ。」

つむぎ 「お母さんは、ともちゃんがつむぎの助けを必要としていたからよって言ってた！ともちゃん心がゆらゆらしてたから、つむぎがお手伝いするためなんだって」

山田 「なるほどな。」

つむぎ 「うん！つむぎ、今まで神様になるためのおべんきよう、とっても大変で嫌な日もあったけど…ともちゃんのお手伝いは全然大変じゃなくて、すっごく楽しかったんだ！つむぎ、お母さんがいつも楽しそうにお仕事してる理由、分かった！」

山田 「そうかそうか。」

▼そこにハッピを着た人達が登場

会員 「会長、こつちも片付けていいですか？」

山田 「お。そうかもうそんな時間か。さつきと片付けねえと。あーじゃあ、そつち頼むわ。（会員がわかりました、と移動していくのを見てから）よおしつむぎ、お前も手伝えよ！」

つむぎ 「ええー！またお手伝いー?!」

山田 「あつたりめえだ！ほら、気合い入れてやるぞー！」

つむぎ 「つむぎもう疲れたのにい！」

▼屋台、撤収

▼暗転。

▼チャイム。  
▼制服姿の友、女子高校生たち喋りながら、登場。

友 「で、パフェが高すぎて食べる途中で崩れて、山盛りのマスカットが床に転がつちゃって…」

女子高生E 「あつはつはつ。傑作！友ちゃん最高。」

女子高生I 「やつぱり都会は、ビルでもパフェでも何でも高くするけーダメなんよねえ。何事も程々がいいと思わん？この辺は山ぼつか高いけど！」

女子高生E 「あつちにも山、こつちにも山つてやんなつちやうよねえー。あ、なんか田んぼ見てたらポン菓子食べたくなってきた。はやく行こ、トメばあの駄菓子屋。」

女子高生I 「あんたつてほんと自由人よね…。」

女子高生E 「うまい棒でもいいよう」

友 「あ、こい…」

女子高生I 「どしたん、友？」

友 「ううん。ここ、夏休みの初め頃、よく来てたんだけど…」

女子高生E 「ええ？なんでわざわざこんなどこに…友ちゃんつてちよつと変わってるねー」

女子高生I 「あんたが言うか？」

友 「よくここので時間潰してたの。………そういえば、祭りの日以来、会ってないかも…」



女子高生「会ってない、って誰と？」

友 「つむぎって子、知ってる？3日間だけこの公園で会ったんだけど」

女子高生「つむぎ？だれやろ、知っちゃおう？」

女子高生「さあ…？」

友 「あ、人前が出るの苦手って言ってたから…」

女子高生「えーなにそれなにそれ！こんな田舎の公園で、3日間だけの友達ってミステリアスで素敵ー！！」

女子高生「あんた意外とそうゆうの好きよね、興味なさそうなのに」

女子高生「だってなんかワクワクせんっ！？ひと夏の思い出くみたいなの？！やつぱ青春って言ったら恋愛かなーって思うけど、神秘とか、友情とかつてのも外せんよねえー」

女子高生「うちらみたいなの関係も青春ってことー？」

女子高生「あんたは結局友情より食欲やんー」

女子高生「え、ひどー！そんなことないっちゃー」

友 「やつぱり仲良いね、2人とも」

女子高生「何言ってるの。友ちゃんだって私たちの駄菓子屋同盟やん？」

女子高生「そんな同盟、加盟した覚えはないんだけど」

女子高生「いいんかなーそんなこと言ってる。あのねえ友ちゃん、この子、友ちゃんが転入してきた時からずーっと友ちゃんと友達になりたいって言ってたんよー」

女子高生「あつ何でバラすんよー！」

女子高生「えっへへ。お守りのご利益かねえ？」

女子高生「お守りなんか意味ないって言いよったくせに。」

友 「お守り？」

女子高生「そーそー。縁結びのお守り。その神社でさあ。私お腹すいてたのにこんな誰もいないところに付き合われて。とんだ災難やつたんよー？」

女子高生「ちゃんと効果あったけいいやんか。」

女子高生「神様とか居らんってー。」

友 「ね、ねえ、その神社って、縁結びの神社、なの？」

女子高生「そうそうっ！家族、友達、恋人。色んな良縁をつむぐ神様が祀られとるっておじいちゃんから聞いたんよ」

友 「良縁を…つむぐ。(ハッとして)…つむぎの、お母さんって…」

女子高生「どしたん？」

友 「……ううん、なんでもない。」

女子高生「ねえ友は神様っておると思う?!」

女子高生「そんなことよりお腹すいたってばあー」

女子高生「もー。今、友に聞いてんのに。」

友 「…ふふ。」

女子高生「あれ、友ちゃん、嬉しそう。なんかいいことあったん?」

友 「え、そうかな…?」

女子高生「あつー!!」

女子高生「なにー?急におつきい声出して」

女子高生「数学のプリント、提出今日までやなかつたけ……」

女子高生「あああああつー!!!!やつばあー!」

女子高生「ごめん友つー!!秒で帰ってくるけえ、ちよつとだけ待ちよつてー!!!!」

友 「ついで行こうか?」

女子高生「…数学の鬼塚先生だけど、ホントに一緒にいく?」

友 「ごめん、やめとく。」

女子高生「よね…」

女子高生「やばいよね、鬼塚先生、絶対ぶち怒つちよーよね?!!!!!」

女子高生「なんで覚えとかんのよ!」

女子高生「私のせいなのつ?!あーもう、お腹すいたのにーつ!」

▼友以外、叫びながらハケ。

▼鈴の音 SE

友 「…つむぎ…つむぎ…いるの??」

▼つむぎ、出てくる。(しかし、友には姿が見えていない)

つむぎ「ともちゃん…?ともちゃん!ともちゃんだ!」

友 「…さつき、友達が、ここの神社が縁結びの神社だって教えてくれたの。」

つむぎ「ともちゃん、いっぱいお友達できたんだね、よかつた!」

友 「ねえ、つむぎ。つむぎが、私と皆の縁を結んでくれたんだよね?」

つむぎ「ううん、違うよ。ともちゃんが、頑張つて勇気を出したんだよ」

友 「つむぎ、聞こえてる?私、つむぎのおかげで変わったの。なりたい自分になれた。」

つむぎ「うん、ともちゃんのお顔、あの花火を見た時みたいにキラキラしてるっ」

友 「つむぎもね、絶対絶対、つむぎのお母さんみたいになれるよ。私、応援してるから!!」  
つむぎ「ともちゃん…あのね…! つむぎ、最近ちょっとずつだけど、お母さんの仕事お手伝いさせてもらえるようになったの!!」

友 「つむぎのおかげで沢山、友達できたんだよ。ありがとう。つむぎには会えなくなっちゃったけど…大丈夫、つむぎもきつと頑張ってるよね」

つむぎ「ふふ、つむぎもつといっぱいお手伝い、頑張るよ!ともちゃんが応援してくれてるんだもん、絶対、お母さんみたいになるんだ!」

▼友、意を決したように上を向く

▼つむぎと友、満足そうに笑う

▼女子高生たち 走って帰ってくる

女子高生<sup>2</sup>「ごめん友ちゃん!」

友 「あれ、早かったね」

女子高生<sup>1</sup>「鬼塚先生おらんかったけえ、ほかの先生に預けてきたんやけど…これ絶対、明日朝から職員室呼び出しコースよ」

女子高生<sup>2</sup>「マジで最悪ー。友ちゃんみたいに早く出しときや良かったー」

女子高生<sup>1</sup>「友はいつもはやいよね、いつ勉強しとるん?」

女子高生<sup>2</sup>「あーもう、勉強の話禁止つ!!もう私のお腹が限界つ」

女子高生<sup>1</sup>「あなたのお腹はいつでも限界やろ」

友 「でも、私もお腹すいたかも。」

女子高生<sup>2</sup>「よね?!ほらあ」

女子高生<sup>1</sup>「えー友そっち側につくんつ?!」

女子高生<sup>2</sup>「はっはー<sup>2</sup>対<sup>1</sup>…この勝負もらったあ!!」

女子高生<sup>1</sup>「まじついてけないわ…あいつの味方しちゃだめやってば、なんとか言ってるよ…  
…って友?先いくよ?」

友 「あ、うん」

▼鈴 SE

▼友 振り返る

女子高生<sup>1</sup>「とーもー?」

友 「ごめん!今行くー」

▼友 頷く

▼3人ハケ

▼緞帳降りる